片岡安祐美
Ayumi Kataoka

大阪市人権啓発
マスコットキャラクター
「にっこりーな」

男女の性差にこだわらず、おぎない合ってハッピーに！

コメディアンの欽ちゃんこと萩本欽一さんが創設した社会人硬式野球クラブチーム「茨城ゴールデンゴールズ」の選手で、監督でもある片岡安祐美さん。かつて女子野球世界選手権で日本代表として優勝に貢献したはつらつ少女は、今では社会人野球初の女性監督として、日々前進し続けている。

父と交わした3つの約束

――野球を始めたのは何歳ですか？

9歳から学校の部活でです。高校野球がカッコよくて。やりたくて父に相談しました。父は、昼は高校野球、夜はプロ野球と、一日中テレビ観戦するほど野球好きでした。

――賛成してくれたのですか？

いいえ、最初は反対していました。父は熊本工業高校の元野球部員。練習のキツさや続ける大変さを知っていたので「中途半端な覚悟ではできないぞ」と。でも、日頃から興味を示す私を見て「娘は絶対野球をする」と信じてて、内心喜んでたそうです（笑）。

「途中で投げ出すな」「女の子だからと特別扱いしない」「やるからにはレギュラーをとりなさい」の3つの約束を守るならと許してくれました。

甲子園に出て、プロの選手になる！

――中学の野球部には男子しか入れなかったんですよね

はい、学校側も前例がなくて相談されたようですが、熱意が伝わり受け入れてくれました。以来、野球は生活の一部となり、毎日素振りしたり、タオルを手にしてシャドウピッチングしたり、家の近所を走ったり。キツいけど、やっただけ上手になれるし、試合で活躍すると父がとても喜んでくれたので、純粋にうれしかった。

中3の夏まで、高校野球は男子だけと知らず「甲子園に出て、ドラフトで指名されて絶対プロになる！」と思っていました。男の子にからかわれても聞き流して『見とけよ、まけるもんか』と試合でヒットを打って『へんっ、どうだ！』って。親も「お前らしく好きなことしてるだけだから、堂々としてなさい」と言ってくれてたのです。

男子に混じって高校球児

――高校はどうやって決めたのですか？

ソフトボールや陸上など、他の競技の選択肢もありましたが、「プロ野球選手になる！」という夢が捨てきれませんでした。父に甲子園に連れて行ってもらうと、やはりどうしてもそこに立ちたくて。「出場規則を変えてやろう」という意気込みで熊本商業高校に進学し、特例で野球部に入れてもらいました。

結局、規則は変わらなかったけど、女子野球の日本代表チームで優勝できたし、そのときに生まれた仲間との絆が、ずっと後になって私に力を与えてくれたのです。

――どんな力になったのですか？

女子野球の日本代表になったばかりの頃は、キャプテンが恐くて泣いたこともありました。でも何年もたってその人から、不意に「アユのおかげで、私たち『野球やってる！』って堂々と言えるようになった。とても感謝してる。私は関西で女子野球を広める、あんたはテレビにもどんどん出て！」って言われて…。大きな勇気をもらい、今度はうれしくて泣きました。

欽ちゃんとの出会いで新たな扉

――欽ちゃんこと萩本欽一さんとの出会いも訪れました

高校3年の12月に、萩本さんから突然電話をいただきました。実は「仮装大賞の番組で香取慎吾さんと司会してる人」程度の認識だったのですが、はじめてお会いしたとき、「いい目してるね、将来何をやりたいの？」と言われ「野球に携わる仕事をしたいです」と答えたら、「携わるだけでいいの？うちに来ればプレーができるよ」と。

チームには甲子園に出場した選手や元プロ野球選手がいっぱいで、もっと上手くなれるかもとワクワクしました。

――2005年に入団、どんな生活でしたか？

大学に通いながらだったので、授業を終えてから移動して夜まで練習、土日も練習。自炊生活で時間的にキツかったけど、知ることすべてレベルが高く、充実した毎日でした。

親元を離れ好き勝手にやってこれたのは、いつもまわりに理解者や応援してくれる人がいたから。親からは「感謝の気持ち忘れるな」と言われています。

――2011年に監督になって欽ちゃんから、何かアドバイスは？

「選手に慕われる監督になりなさい」と言われました。近頃やっと意味が分かってきた気がします。

野村克也監督や星野仙一監督といった名監督のマネは私にはできません。

まわりから「引き出しを増やせ」と言われ、いろんな先輩の本を読んで言葉を借りたりもしました。でもあるとき自分の経験をそのまま話したら「心にしみた」と選手から言われたのです。

それからは、私なりのやり方で監督を目指そうと考え直しました。最近は「選手に監督にしてもらってるなあ」と感じています。

おたがいが信じ合えるよう

――監督として一番大切にしていることは？

先ほども話しましたが、名将と呼ばれる監督と同じように振舞ってもチームはまとまらない。人として自分の弱さや悩みをときには素直に伝えれば、選手が支えてくれる。

大事なのは信頼関係で、それぞれが気づけることと気づけないことがあるから、おぎない合えばいい。なんでも男女で区別すると、おたがいハッピーになれないと思います。

――これからの夢を聞かせてください

2004年、全日本女子野球連盟は日本野球連盟への加盟が認められました。また女子プロ野球も一度なくなったけど、2009年に復活して10年が経ちました。新しい動きが受け入れられるのは時間がかかるし、前例がないから失敗もしますが、これからも性差をこえて野球の魅力を広げていきたい。

いま五輪種目は男性が野球、女性がソフトボールと競技が分かれていますが、男女とも両方の種目に参加できる社会になればうれしいですね。

片岡 安祐美（かたおか あゆみ）
1986年熊本生まれ。テレビで見た高校野球に憧れ、小学校の部活を振り出しに、野球を男子に混じって今日まで続けている。02年には女子野球世界選手権で準優勝、03年と04年連続優勝など、日本の女子代表選手として国際的にも活躍。05年茨城ゴールデンゴールズ入団、11年より監督兼務。近著『甲子園を目指した少女』竹書房、『チームの育て方』生産性出版。

茨城ゴールデンゴールズの監督として采配をふる

かなわなかったけれど甲子園をめざした高校時代

絶対にプロになると心に決めた中学時代